

まちづくり ひろしま

第41号 (令和元年5月15日)

読者数：636名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

遺構の力・・・

元中国放送役員 三宅恭次

「シカゴ美術館にあるゴヤの処刑場のデッサン、原爆資料館の被爆者の絵…、それは『私はそこに居た』、『私は見た』の迫真力です。ベトナム戦争を終わらすためペンタゴンの膨大な機密文書を暴いたダニエル・エルズバーグ、彼の原点は幼少期に読んだジョン・ハーシーの『ヒロシマ』です。さらに著名な建築家の彼の父は政府から広島に落とされた原爆の数千倍威力を持つ水爆施設の設計を頼まれましたが、それを断り、建築家も辞めました。父親はエルズバーグが寝ている時『ヒロシマ』を読んだのです」、

これは先月行われた広島ペンクラブの70周年記念例会に招かれた日本ペンクラブ会長吉岡忍氏のスピーチです。彼は文学、絵画の持つ強さ、影響力について「ヒロシマ」の視点から具体的な例を挙げながら、文学などの芸術には人の人生をも変える力があると指摘、「広島文学」には可能性がある・・・。

あの東日本大震災から8年、3月11日前後には新聞、テレビが特集を組んだ。その中に「震災遺構」に関するものも数多くあり、天声人語は「・・・震災遺構は自然の猛威を伝えてくれる。同時に、かつてあった風景の手がかりも与えてくれる。悲しい記憶を呼び起こすとして撤去された建物も少なくない。だからこそ、残されたものに重みがある・・・」。

2年前、陸前高田の「奇跡の一本松」を見に行った。7万本の高田松原で唯一残った一本。根腐れした為防腐処理してそこに立っている。周りをダンプカーが走り回り、消えた市街地を15m嵩上げして“蘇らせる”工事が進んでいる。私は一本松を見上げ佇むのみだった。

世界遺産の原爆ドーム、永久保存まで20年の紆余曲折があった。「悲劇を忘れぬため永久保存を」「倒壊の恐れもある危険建造物、思い出すのも嫌だから取り壊せ」、年月が経ちながらも中々方向性が出ない中、保存へ動き始めた切っ掛けは1959年8月6日の梶山ヒロ子さんの日記「・・・あの痛々しい産業奨励館だけがいつまでも恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう」、ヒロ子さんは翌年16歳で亡くなったが、この遺志を受け継ぎ「広島折り鶴の会」を中心にドーム保存運動が始まった。

一方長崎は・・・。浦上天主堂は爆心地から北東500mのところ、石と煉瓦造りのロマネスク様式の大聖堂は高さ25メートルの双塔の鐘楼を持ち「東洋一の大聖堂」と謳われていたが原爆投下で一瞬に倒壊、一部外壁だけが残された。長崎市は残す方向で検討を進めていたが、当時アメリカのセントポールと姉妹都市提携したことをきっかけに、市長が対米関係を重視して一転「保存」に消極的になり1958年に撤去された。

今年の11月、38年振りとなるローマ法王が来日し広島・長崎訪問する意向を示している。

3月末で退職した広島平和記念資料館館長の志賀賢治さんは「・・・『聞いたことは忘れる、見たことは覚える、体験したことは理解する』。体験がすべてです。・・・被爆者がいなくなる

と、主役は資料、保存に力を入れておくべき・・・」と。

冒頭の吉岡さんは優れたドキュメンタリストで毎年のように広島を訪れており、話の文脈から「広島人よ、もっとヒロシマを見つめ考えよ」との思いを述べたと受け取ったのだが・・・。

ひろしまのまちづくりの動き

① 第2回平和大通り芸術展！

今年2回目となる平和大通り芸術展が2月23日から3月24日の1か月間開催された。昨年よりも展示作品や場所が増え、作品巡りツアーやアートマルシェ、音楽演奏などイベントが盛りだくさん。

週末の土曜日、作品巡りツアーに参加したが、子供連れの親子が多く、アートに触れ合っただけで楽しそうな雰囲気。キュレーター（学芸員）の解説を聞きながら作品を眺めると味わいも深まる。その後、サクソフォン演奏者による合奏を聴き、テントのマルシェでアートな一品を買い、なんとも至福のひと時。

まだ2回目なので市民の認知度は低いですが、回を重ねていけば、展示作品も充実し、エリアも広がり、市民の参加も増えていくだろう。ラ・パンセ像付近を中心に週末の昼下がりにはいつもアートなことが催されている風景を期待したい。



② 広島平和記念資料館・本館リニューアルオープン！

平和記念資料館・本館は耐震改修と展示内容更新のため閉館していたが、2年ぶり4月25日にリニューアルオープンした。

東館1階からエスカレーターで3階に上がり、被爆前の町並み写真を見ながら原爆投下のジオラマまでが導入展示。

渡り廊下を通過して本館へ。本館は被爆の実相を訴えるために「8月6日のヒロシマ」と「被爆者」をテーマに展示。

被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料を展示し、1945年8月6日、広島に何が起きたのか。その後、被爆者がどんな悲しみや苦しみを背負って生きたのか、遺品を遺影や遺族の手記とともに展示。改装では、被爆の事実を伝えるだけでなく、人への内面的な被害の展示を重視している。

遺品とその説明文ではなく、持ち主の写真や家族の短いエピソードやメッセージが添えられているので、被爆者の魂の叫びが胸に迫ってくる。最後の展示コーナー「生きる」には、白血病で亡くなった佐々木偵子さんの針を使って折った極小の折り鶴が置かれていた。

会場全体の照度を抑え、落ち着いた雰囲気を作ろうとしているが、当日は入館者で混み合い、じっくり味わうことができなかった。もう少し落ち着いてからの来館をお勧めしたい。

被爆体験者が年々減少していく中、資料館の果たす記憶の継承の役割が大きくなっていく。



○ 広島復興の軌跡・人物編（第16回）～ジャスティン・ウィリアムズ国会課長

～平和都市法制定に側面から支援・注力したGHQ関係者～

はじめに

今回は異色の外国人を取り上げたい。本人がどこまで広島のことを考えての行動であったか、今となっては確かめようもないが、本人にとっても予想外の展開があり、広島から感謝さえもされているのであるから、不思議な成り行きというほか無いであろう。広島戦後復興史の中でも、特筆すべき展開となったことも間違いない。GHQの日本占領期における政策については様々な評価のある中で、広島に対してこのような態度を取ったGHQ関係者がいたこと、そこに一つの物語が形成されたことを、記憶に留めておきたい。その物語の中心人物が、ジャスティン・ウィリアムズという外国人であり、GHQ関係者なのである。なお、ジャスティン・ウィリアムズ著の出版物¹⁾では、明確にウィリアムズとされているが、広島での出版物ではウィリアムズと記述されていることが多い。引用は原文に従うが、本文ではウィリアムズとする（以下敬称略）。



1. ジャスティン・ウィリアムズについて

GHQという全体組織の中でみると、週刊新潮編集部編「マッカーサーの日本(下)」(新潮文庫)によれば、占領軍組織図が掲載されていて、そこにマッカーサー元帥を頂点とした純然たる占領軍組織(GHQ)と民生機能を含めて占領政策を統括した組織(SCAP)が示されている。その中で重要な役割を担った民政局において、ホイットニー少将(あるいは陸軍大将)が局長、ケーディス大佐が次長、ウィリアムズ博士が国会課長(Chief of Parliamentary and Political Division, Government Section)という配属を確認することができる。当時、GHQの占領下において、法律はGHQからの”approval”(承認)なしには制定できなかつたし、日本の政治・行政全体がGHQを刺激しないようにというのが至上命令であった。

それにも関わらず、財政的に行き詰まった広島は戦災復興事業を推進しようとして、必然的にGHQをも含めて政府を動かすような復興国営請願運動を展開していき、ついに大掛かりな制度改革を迫ることとなった。それが平和都市法制定運動であり、前号で既述したように、寺光忠らによって法案が起草され、必然的にGHQ関係者との折衝が焦点となった。そこに登場するのがウィリアムズなのである。

2. ウィリアムズは広島に対してどう関わったか

広島新史シリーズの中で出版された資料編Ⅱ(復興編)において、復興過程での関係資料を収録しているが、「広島平和記念都市建設法を巡る浜井市長の回想(2)²⁾」の中で「上京して間もなく、衆議院議員松本滝蔵氏の案内で、GHQの国会担当官であるウィリアムズ氏のところに行き、松本氏から運動の主旨を説明してもらい、英文に翻訳した法文の草案を提示した。ウィリアムズ氏はマユ一つ動かさず、じっとその法に見入ってしばらくの間、もの一ついわなかった。私は、その間、せいぜい時間にして一分か二分かのわずかな時間であったろうが、実に不安な気持ちで、彼の挙動を見守った。なぜならば、彼が『だめだ』と言ったら、国会のことは万事終りなのである。ところが、彼はやがて法案から目を放すと、『これは素晴らしい。今日まで日本の国会でやって来たことはすべて国内の事ばかりだが、この法案が決議されれば、それは国際的にも大きな意義を持つだろう。国会に行って、速やかに決議するよう交渉するがよい。』と記述されており、ウィリアムズはさらに念を押すように、「国会から法案の承認を求めてきたら、私自身がマッカーサー元帥の所へ行って、サインをもらってくる。」とさえ言ったというのである。これは、浜井市長が昭和24年4月15日、任都栗議長とともに上京して、いよいよ各方面に向かって特別法制定の猛運動を展開したとされる時期であった。

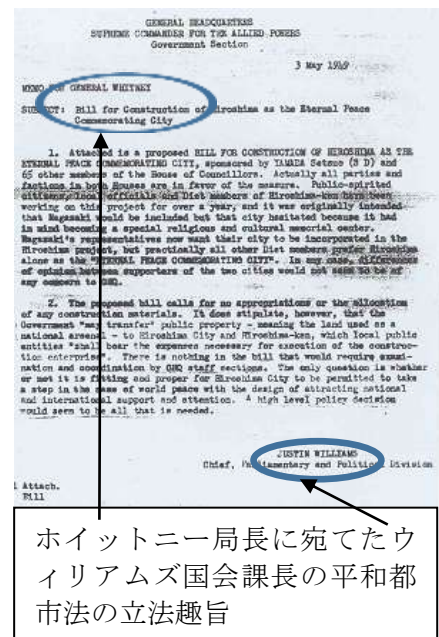
さらに回想(3)において、当時の政界の中で民自党の星島二郎氏に対して「ウィリアムズ氏は極めて熱心に、ぜひ法案を通すようにと推奨してくれたということであった。」と記述しており、本気になっていたことがわかる。

最終的にウィリアムズがホイットニー局長を動かし、マッカーサーから承認を得たことになる。その証拠文書が図の通りである。この過程を後にウィリアムズは書簡³⁾として残しており、そのまま資料編に掲載されている。

3. ウィリアムズはなぜ広島を特別扱いしたか

通常、ウィリアムズの広島への関与を称えてここで終わるのであるが、なぜウィリアムズは広島へ特別の配慮をしたのであろうか、もしウィリアムズが無関心であったら、広島はどうなっていたであろうか、という疑問に対して言及してみよう。

GHQの日本占領政策は連合国アメリカに対して戦争を仕掛けて、著しい被害を及ぼしたのであるから、日本の制度そのものや指導者を徹底して糾弾し、改革しようとしたであろう。それこそまさにマッカーサーの政治改革であり、



ウィリアムズが記述している通りである。しかしそのやりかたは極めてアメリカ流であり、それも時代とともに次第に変質するという、一筋縄に収まらないものであった。巨大組織であるGHQで推進されるとき、日本の中から湧き上がってくる要求に耳を傾け、そこに寄り添って導かれる方向性に理解を示す関係者がいたとしても不思議ではない。特に広島から被爆後の窮状を聞かされたとき、心を動かされた関係者もいたのではないかと。第26号で既述したモンゴメリーの場合も、GHQに掛け合って原爆に迫る資料を請求し、それを広島で展示しようとしたのであった。これは体よくGHQで断わられたのであったが、ウィリアムズの場合、立法化が決してアメリカの立場を危うくするものではないと確信し、一つの決断に至ったのである。浜井と任都栗を待たせながら、平和都市法の立法化の趣旨と法案を読んでいるまさにその数分間に、広島の運命が凝縮されたことになる。

それはGHQの占領政策推進者の一時の気まぐれであったろうか、復興国営請願レベルから平和都市法制定趣旨と法案を承認する段階へ、ウィリアムズにとってはほんの少しの変移かもしれないが、広島にとっては、平和記念都市建設へゴーサインを提示されるという著しい差異となった。それはまさにウィリアムズの介在の結果であった。(編集委員 石丸紀興)

補注

- 1) Williams, Justin. "Japan's Political Revolution under MacArthur" (The University of Georgia Press, 1979). ジャスティン・ウィリアムズ著、市雄貴・星健一訳「マッカーサーの政治改革」(朝日新聞社、1989)。
- 2) 広島市編: 広島新史資料編Ⅱ(復興編)(広島市発行、1982) pp. 280~284「広島平和記念都市建設法をめぐる浜井市長の回想(2)、(3)」
- 3) 前掲 2) pp. 287-292、「ジャスティン・ウィリアムズの書簡」 「GHQと広島平和記念都市建設法」
- 4) ウィリアムズの略歴等は続編に予定している。

□ ほっとコーナー

母の絵日記

会社員 岡田 睦子

一ヶ月半の介護生活の後、空き家になった実家のかたづけをした。母を看取ったあと、12年間父が一人暮らしをしていた家は、まさにゴミ屋敷。

実家まではバスで片道2時間。車は持ってない。必要なもの、残したいものだけ持ち帰ったら、あとは手伝いを申し出てくれた親戚の好意に甘えて、ゴミの後始末はお願いすることにした。

アルバムも、全部は重くて持ち帰れないから、何冊かだけに厳選。父が趣味にしていたカメラは、多少カメラの心得のある末娘の手元に送られた。

他に、なにか思い出に取っておきたいものは、、、と探していると、本棚の隙間から小さな絵日記が出てきた。母が生前書いたものだった。

母は、筋肉が徐々に衰えていく病気だった。外出もままならず、大好きなカーブ観戦も球場に足を運ぶのがだんだん難しくなって、もっぱらテレビ観戦になっていた。

孫のお宮参りや七五三も、ひとり留守番だった。そんな生活の中で書かれた絵日記だった。

孫のこと、ニュースのこと、カーブをはじめとした、テレビでのスポーツ観戦のこと、日常のちょっとした出来事。身体の自由が利かない愚痴は、どこにもない。

あまり上手くはない字と絵だけれど、とても味があって、優しい。ページをめくっていると、私が幼い頃、毎晩寝る前に色々なお話を語り聞かせてくれたことを思い出した。

孫ができてからは、泊まりに来た孫たちと順番にお話を考えて繋いでいく『ぐるぐるお話大会』もしたっけ。

ひととおりを通したあと、簡素なつくりの絵日記を鞆の内ポケットにそっと納めた。



○ 「時代を語り建築を語る会 (第24回)」報告

語り人：小倉桂子氏 (平和のためのヒロシマ通訳者グループ代表)

～広島への被爆者は復興をどう眺め、どう伝えてきたか～

自分の被爆体験をもとに復興していく広島のまちの様子や被爆者の心情及び通訳の経験を通じて得られた知見などを聞くことができた。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2019年3月31日 (日) 15:30～17:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：1937年広島市生まれ。8歳の時被爆。1984年平和のためのヒロシマ通訳者グループ設立。「平和公園ガイド」、「ヒロシマアテンションプリーズ」など出版。谷本清平平和賞受賞。

☆ 自己紹介

・8歳の時、爆心地から2.4km離れた牛田で被爆。20歳過ぎで結婚し専業主婦だったが、41歳の時に平和記念資料館館長で市の公的通訳もしていた夫が急逝。夫の友人のロベルト・ユンクから通訳を要請され、42歳から81歳の現在まで海外の要人などに通訳や被爆証言を行う。

☆ 被爆後の状況

・自分は家の前の路上でピカッと光り、爆風で吹き飛ばされ一瞬気絶。気がつくと辺りは暗闇で弟の鳴き声が聞こえた。

・被爆直後は誰も自分の家に爆弾が落ちたものと思い、広島が火の海と知り、啞然とした。自宅は爆風で天井が吹き飛ばされ、床・壁はガラスが突き刺さるが、修理して住む。

・救護所となった早稲田神社には市街地から逃れた被災者が集まり、次々に息絶え、牛田公園で700人以上が荼毘に付される。

・街中では戻ってこない家族を探し回る人たちも入市被爆。ポツポツとバラックが建ち始め、原爆孤児の浮浪児たちはくず鉄やたばこの吸い殻を拾い集めたり、靴磨きをしたりして生活。

☆ 被爆者の気持ち

・被爆者であることを知られたくないので、できるだけおとなしく控えめにしていた。親は怖がらせたくないの、我が子に原爆の話はしない。子は余生が少ないと感じ始めた祖父から聞かされることが多い。オバマ大統領の来広を期に本当のことを話せるようになった。

・最初の差別は広島市民から受けた。被爆者はそれぞれ大きなトラウマを持っており、我が子の風邪の治り具合でも被爆の影響ではないかと不安になる。核兵器の持つ残酷さである。

・被爆の体験を通して人の痛みが分かり、つらさを分かち合うことを学ぶ。

☆ ロベルト・ユンクについて (ユダヤ人ジャーナリスト、「灰墟の光—蘇るヒロシマ」著)

・19歳の時、調査に来広したユンクから「平和大通りや市民球場の建設には反発が多かったと思うが、君はどう思うか？」というインタビューを受けた。市民球場ができたときはうれしく、カクテル光線は希望の光と感じた。

・最初にサダコと千羽鶴の話の世界に紹介したのはユンク。ユンクは原爆による加害者(強者)と孤児や貧困層(弱者)に焦点を当て、「広島に来て私の人生は変わった」と書いている。

☆ 広島の意味

・広島を訪れる人に対して、自分はどう生きるべきかを示唆できるまちであってほしい。そのためには広島への悲しみの原点、オリジナルなものを残すべき。平和記念公園に残る慈徳寺跡の土に触りたくて来る人もいる。資料館の展示遺品も触れるようにした方がよいのだが。

☆ 会場からの意見

・福島での原発事故でも被災者に対する差別が生まれたが、広島での教訓が生かせないものか。

・世界遺産イコール観光ではない。平和記念資料館も原爆資料館の名称の方が適切だし、資料館の「観覧料」も見世物ではないので「入館料」の方が正しいのではないかと。オブラートで包むことにより、原爆の記憶を風化させていくような気がする。

・観光客が増えホテルも建っているが、一定規模以上のホテルには原爆関連の映像文化ライブラリーの設置を推進できないか。昼間の観光で見切れないときに、ホテルに帰って見れるようなサービスを備えれば、広島への情報発信につながる。

・広島への建築には平和を希求するデザインをどこかに取り入れるようにしてもらいたい。

(編集委員 瀧口信二)

○ 本「ヒロシマの復興を支えた建築家たち」紹介

廃墟となった広島のマチに立ち、地元の建築家たちがいかなる思いで復興に取り組んできたか、あまり語られていない。著名な建築家や大手設計事務所の活躍は世間の脚光を浴びるが、村田正、大旗正二、河内義就ら地元建築家はほとんど知られていない。彼らの戦後の活動はゼロからスタートせざるを得ない広島の復興の苦難の道そのものであった。



☆ 全編の概要

1 被爆直後の広島の復興建築と建築家

被爆後から昭和30年までの広島の復興建築を整理し、その設計者の全体像を把握している。官公庁の施設は国・県・市の営繕組織が設計しているが、民間施設は暁設計事務所をはじめとする地元建築事務所が大きな役割を果たす。昭和24年の平和記念公園の設計コンペ実施以降、外来の建築家・事務所・ゼネコンの進出が本格的に増えていく。

2 地元設計事務所の誕生—暁設計事務所

戦後の広島に初の設計事務所として村田が暁設計事務所を昭和21年に開設し、被災して内部が焼失した福屋デパートの一部を拠点としてスタート。その後、河内と大旗が参加し、広島児童文化会館、農協ビル、広島市民病院などの代表作品を残す。

村田は大正3年生まれ、広島市出身で広島工業学校を卒業し、広島県の営繕課に就職したが、5年で退職。東京の設計事務所を経て、地元の東洋工業に就職し終戦を迎える。暁設計では代表として主に対外的な営業活動を担当。

暁設計事務所は多くの人材が育ち、各自が独立して、やがて不景気の中で暁の名称は消えていく。村田も村田・大旗建築事務所を経て村田相互設計事務所を設立。

3 建築家大旗正二

大旗は大正2年、島根県生まれ。横浜高等工業学校を卒業し、南満州鉄道の営繕組織に入社。昭和23年に帰国し、暁設計事務所に入所。河内が独立後、昭和29年に村田・大旗建築事務所を開設し、さらに昭和41年に村田と別れて大旗連合建築事務所を設立。

独立後も暁設計時代の実績を評価され、病院建築や農協関連の建築などを多数手がける。大旗連合時代の代表作は設計コンペで勝ち取った宮島町庁舎など。地域の伝統文化を積極的にデザインに導入し、地域の建築発展に果たした役割は大きい。

4 建築家河内義就

河内は大正2年、広島市生まれ。大旗と同じ横浜高等工業学校を卒業後、逓信省の営繕課に入省。4年間日本を代表する建築家山田守の下で仕事をした後、満州国に転勤。戦後すぐ帰国したが、逓信省には戻らず、焼け野原となった郷里広島の復興に尽力することを決意し暁設計事務所に入社。

事務所での設計の傍ら、平和記念聖堂や平和記念公園のコンペに参加し、佳作などに入賞。昭和26年に独立して河内義就建築設計事務所を設立。広島を拠点に幅広い設計活動を行い、一方では建築設計関連の団体の要職を務め、地元では大きな影響力を有していた。

5 広島の戦災復興都市計画と丹下健三

平和記念公園の設計を行う前、終戦直後に戦災復興院から委嘱を受けた丹下グループが行った広島復興計画の提案について考察。広島県及び市の戦災復興計画が先行しており、土地利用計画の方は採用項目が少なかったが、用途地域制に関わる提案の多くは採用された。

6 その他

上記のほかに、比治山に建築家前川国男が設計した原爆傷害調査委員会(ABCC)米国独身寮の建築、日本を代表する建築家たちが参加した広島平和記念聖堂のコンペ作品、昭和29年に来広した世界的建築家ワルター・グロピウスの演説と地元建築家との座談会、戦災復興時に形成されたヤミ市などについて解説している。

コメント

戦後の広島地元建築家のルーツをテーマにした研究論文を編集したものである。同著者が戦前の外来建築家の活躍を紹介した「近代日本の建築活動の地域性」(溪水社)と合わせて読むと広島の近代建築の変遷がよくわかる。(編集委員 瀧口信二)

注) 定価: 2800円+税、著者: 李明、発行所: 宮帯出版社、発行: 2012年8月6日

都市の居場所

安田女子大学教授 藤本和男

ジェイン・ジェイコブズが指摘したように、近代都市計画が生み出した均質な都市空間は魅力に乏しいものになっている。本来、都市には様々なアクティビティの欲求があり、楽しみが満ちている。ヨーロッパの諸都市では人々が日常的に利用し楽しめる広場や歩行者空間が数多くあるが、わが国の都市は既に規制により均質な空間が出来上がってしまっており、そこに歩行者にとっての魅力的な空間づくりを反映するには予算も時間もかかる。

これから紹介する事例は、こうした均質で高密度な都市空間に対して抵抗するかのように、これまで使われていなかった都市のスキマを活用し、それによって新たに発生するアクティビティが賑わいや魅力を引き出し、都市の居場所となっている。タクティカル・アーバンイズム(TACTICAL URBANISM)と呼ばれるこうした手法はまちを変える可能性を秘めており、都市の魅力創出のための環境整備の在り方に示唆を与えてくれる。

1 裏庭

神戸市灘区の水道筋商店街の店舗と店舗の隙間、人がひとり通れるかどうかの路地を抜けると、これまで使われていなかった袋小路の裏庭がある。物置になっていたこのスキマ空間を活用することで、隠れ家的な都市のリビングスペースが生まれている。



イートンテラス・クロドニーの裏庭

2 転用

日本では道路空間を使用するには、これまで厳しい制約があった。近年の規制緩和で道路空間を弾力的に利用促進する方向に向かっているが、まだ活用されている例は少ない。

車道のパーキング・スペース（時間制限駐車区間）を転用し、歩行者のための空間を生み出すパークレット（Parklet）の手法や、歩道上に置かれる停留所を時間待ちのためだけでなく、少し工夫を加えることで交流空間に変えている札幌市の事例のように、エリア・マネージメントにより車から道を取り戻す可能性が生まれる。



札幌市内の停留所



バンクーバーのパークレット
(photo Modacity)

3 高架

鉄道の高架下は一般的に駐車場や倉庫として利用している場合が多い。また、未利用で放置されているケースも多く、寂しい空間となっている。しかし、こうしたスキマ空間は高架ならではの高さやアーチなどのデザインなど、潜在的な魅力を持つ空間でもある。

灘高架下と呼ばれるこのエリアには現在、使われていない高架下を利用した展示スペースや工房、パーティ・スペース、空きバルなどがあり、市民が日常的に利用している。中に入るとまるで美術館のような天井の高い素晴らしい空間を体験できる。



4 公園

公園では民間の営利活動が行われることは原則、都市公園法によって禁じられている。このために夜の公園は暗く寂しいものになってしまう。これに対して広島市の呉市蔵本通り公園屋台や、江波山公園のレストラン、シェ・ヤマライなどは、夜の公園に賑わいや魅力を取り戻すのに成功している数少ない事例である。



江波山公園 シェ・ヤマライ



蔵本通り公園イタリアン屋台

○ 広島市中央公園を考える⑩ アイデアコンペ (平成23年) からの提案その4

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、広島アイデアコンペ実行委員会が平成23年に実施した被爆100年広島市中央公園アイデアコンペの中から大上泰弘氏の提案「未来へつづく新たな広島の姿」(佳作)を紹介する。

未来へつづく新たな広島の姿～発進・発信・発振～

このアイデアコンペは、広島平和記念都市建設法(以下、平和都市法)の精神を具現化するために、広島市中央公園をいかなるコンセプトを持って整備したらよいか、現実的な制約条件に捉われることなく、自由な発想で提案してもらった。

大上氏は建築系の大学院生らしくコンペの趣旨にのっとり、まず広島のことを学び、現状分析を踏まえた上で、平和記念都市広島の特性をとらえた提案を行っている。

1 コンセプト：未来へつづく新たな広島の姿～発進・発信・発振～

原爆ドームや平和記念公園などの記憶の象徴だけでなく、市民生活の質の向上や都市のさらなる発展による広島の発進と平和都市として世界に発信し、広島の力を平和の中心として波紋を形成するように発振する。未来へつづく新たな広島の姿を形成する3つの柱を「発進・発信・発振」と位置付ける。

広島を中心性の再構築と魅力の形成を行い、それらを伝えることで世界に対する平和の象徴都市をつくる。

*** 発進** 広島を象徴でもある水辺空間を活かして都市の潤いの空間を創造する。近接する歴史・商業・居住の地域間の中心として個々の地域と連携性のある空間とする。情報化都市を推進し、国際都市としての成長を図る。

*** 発信** 戦争の記憶を都市の滞在者だけでなく、情報・芸術といったメディアを用いて発信する。

*** 発振** 歴史と都市の融合によって発展した広島を平和の記憶としてだけではなく、都市の魅力を付加して日本さらには世界へ伝える。



イメージパース

2 現状分析

・ 広島都市圏を対象とした広域的な課題として、圏内における若者の関東及び関西圏への流出、大型商業施設の郊外化による都市の空洞化や求心力の低下、情報産業やサービス産業の遅れによる若者の就業機会への影響、交通インフラと他都市とのネットワークが弱いことなど。

・ 中央公園を対象とした狭域的な課題として、南部の祈禱地域と東部の行政及び商業地域と北部の居住地域が交ざり合う地点、平和公園から北に抜ける祈禱軸と広島駅から中心市街地に抜ける都市軸の交点、都市間バスネットワークの集積地に隣接、中央公園内の老朽化した公共施設の分散配置、旧市民球場跡地の利用計画など。



ゾーニング・配置計画

3 現状分析を踏まえた提案

・ 祈禱・商業・居住地域による重層地域の中に広島の風土ともいえる水辺環境を重視した憩いの場を創造する。観光客の回遊性を高め、広島の魅力の再発見を誘うと共に市民の身近な都市公園の機能を併せ持つ。

・ 中央図書館やこども図書館、こども文化科学館や青少年センターなどの文化公共施設を集約させる。利用性の向上と次世代を担う子供たちの成長の場として公園の統一感あるメッセージ性を形成する。

- ・広島戦後復興に大きな役割を担った旧市民球場の跡地は、広島戦争の記憶と平和のメッセージを世界に広める拠点として平和音楽堂に生まれ変わる
- ・広大な中央公園を文化施設や音楽堂などの**公共施設・学習エリア**、水辺空間などの**自然環境エリア**、広島城周辺の**歴史・文化エリア**の3ゾーンに分け、エリア間の緩衝領域は緑地帯として利用者の回遊性を高めると共に水辺空間と緑地帯により多様な自然要素を持たせる。

4 主な提案施設概要

- ・**平和音楽堂** 原爆ドームに対して未来の平和を尊重する鶴の羽をモチーフとしたデザインの開閉型ドーム形状を提案。平和音楽祭、児童の演劇祭、修学旅行児童の歴史学習などのイベントに利用。イベントがないときは、河川に広がる自然環境エリアと一体的に市民のくつろげる空間として利用。
- ・**生産技術継承・情報メディア施設** 生産技術を後世に伝える場と情報メディアの拠点を設け、企業誘致や若者の就労の場を創出すると共に観光者向けサービスを提供。
- ・**芸術施設** 現存の美術館にアーティストなどのための芸術創作・展示空間を付加。

5 中央公園の周辺エリアへの発展

- ・公園北側の基町高層アパートは戦後の住宅対策として歴史的な意味も大きいため、建物を変化させるのではなく、若者が利用できるように用途を変更する。
例えば、若者の芸術活動のアトリエスペースとして個室を設ける、学生のベンチャー企業のオフィスを取り入れて若者の誘致を図る、外国人向けのユースホステルにして海外の若者の旅行者を増やす、アパートに囲まれた中心部の屋上緑地を市民農園とする、などの提案。
- ・平和大通りに情報関連企業を誘致し、情報サービス産業を発展させると共に情報サービスを用いた平和都市広島をアピールする。

(以上は大上泰弘氏の提案の概要)

<コメント>

- ・当時、大上氏は神戸市出身で神戸大学大学院に在学中であり、広島に住んだことはないが、このコンペを通じて広島史や特性をよく学ばれたことが提案の中に読み取れる。
- ・平和都市広島は原爆の記憶を伝えるだけでなく、平和を作り出す手段として音楽堂を提案。また、まちを元気にするためには平和を訴えるだけでなく、若い人の就労の機会を増やす必要があり、情報メディアの拠点整備を提案。そうすることにより、観光者向けのサービスもできるし、平和都市をアピールすることができるという指摘は多くの共感を得るだろう。
- ・中央公園周辺の提案も、基町高層アパートのアトリエスペースや起業家向けオフィスなどへの用途変更は、アートによる情報発信や若者の活躍できる場の提供などに寄与する。
- ・総じてバランスの取れた適格な提案で、どれも実現できそうである。

(編集委員 瀧口信二)

*参考資料：被爆100年広島市中央公園アイデアコンペ受賞作品

<http://www.urban.ne.jp/home/hideacom/houkokusyo/jyusyousakuhinn.pdf>

○ 読者へお知らせ

メルマガ7周年記念シンポジウムへのご案内

被爆100年後の広島のマチの姿をどう描き、どう実現するか

未来を目指すまちづくりひろしまの会(仮)

私たちは2011年に市民参加型の被爆100年広島市中央公園アイデアコンペを実施しました。このコンペを通じて、参加いただいた市民の平和を希求する広島への熱い思いを感じることができました。

私たちはその思いを大事に育てていくため、2012年にメルマガ「まちづくりひろしま」を開設しました。皆様のお陰で広島のみならず、興味を持つ人たちの情報交換の場として、メルマガの読者は少しずつ増えてきました。そして今回の7月号配信で7周年を迎えます。

そこでメルマガ7周年を記念して、被爆100年後の真に世界に向けて平和を発信するにふさわしい広島のみならず、何かをテーマにシンポジウムを行うことにしました。

特に若い人たちの参加を期待して、前半の経験豊かな人たちのプレゼンテーションの後にワールドカフェ風ディスカッションを用意しました。リラックスした雰囲気の中で気軽に議論し

てもらい、結論を出すのが目的ではなく、意識を高めていくことを狙っています。

「広島平和記念都市建設法」に謳われている「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設する」というまちづくりの理念を目標に掲げ、その実現のために私たち市民は何をすればよいのかを一緒に考えたいと思います。

市民の、市民による、市民のためのひろしまを実現するために、一人でも多くの市民の皆様のご参加をお待ちしています。

***日 時**：2019年7月21日（日）13:30～17:30

***会 場**：合人社ウエンディひと・まちプラザ北棟6階マルチメディアスタジオ

***テーマ**：被爆100年後の広島のまちの姿をどう描き、どう実現するか

***基調講演**：人選中

***パネラー**：石丸紀興氏（広島諸事・地域研究所主宰）

松波龍一氏（松波計画研究所代表）

渡部朋子氏（ANT-Hiroshima 理事長）

***ワールドカフェ風ディスカッション**：5班編成（1班5人程度）によるグループ討議
班のホスト役は人選中（希望者は申込をお待ちしています）

***定 員**：112席、入場無料、事前申込不要。

ワールドカフェとは？

「カフェ」にいるような雰囲気、参加者同士がリラックスし、気楽で自由に対話できるように考えられた話し合いのやり方です。

ワールドカフェに参加希望の方へ

定 員：25人程度（事前申込が必要）

申込先：広島アイデアコンペ実行委員会事務局

メール：hiroshima.idea.c@chugokuc.co.jp

記入事項：①名前②住所③年齢④メールアドレス

□ 編集後記

私たちは「踊り場」に立って、これからどうする。

時は意識、無意識を問わず刻々と変化を遂げながら流れています。平成から令和に元号が変わった瞬間に、私たちはここにいます。ここまでの来し方を見つめ直し、これから方向を探求するいわゆる「踊り場」に立っています。「踊り場」とは、階段を上りながらとどまって一休みしたり、冷静になってみてそこからの方向を変えるためにあります。

さて、令和元年(2019年)は、広島のみちづくりのバイブルである「広島平和記念都市建設法」制定(昭和24年(1949年))から70年を迎えます。この歴史的な時に「踊り場」に立って、これからどんな社会を、どんな経済状況を、どんな文化環境を目指していくまちづくりを進めるのか議論を始めましょう。

そこで、平和都市法の賛否を問う住民投票(7月7日)及び同法公布・施行(8月6日)の日にちなんで、前記の**メルマガ7周年記念シンポジウム**を開催します。

メルマガ読者のみなさん、ぜひ周りの方をお誘いの上、ご参加ください。大いに自由に議論を戦わせましょう。詳細は、追ってお知らせします。(編集委員 前岡智之)

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第25回)」開催

・語り人：中川利國氏（元被爆70年史編修研究会事務局長）

・テーマ：被爆70年史の編集を終えて（仮称）

・開催日：2019年6月28日（金）18:30～20:30

・会 場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室A（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）

・会 費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料

・参加申込：広島諸事・地域再生研究所

電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com

・主 催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！
(投稿は500字程度でお願いします)**

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表